

はじめに

みなさん、こんにちは！これから、二年生の皆と一緒に日本史Aを勉強していきます**前**と**野澤**です。よろしくお願いいたします！現在、世界に目を向けてみると、コロナという新たな脅威に人類はさらされています。コロナだけではなく、環境問題、人権問題など世界では新たな問題が山積みとなっている状態です。そのような状態の解決の糸口となるのが、「歴史学習」にあります。過去の人物や出来事から事実、因果関係、心情など様々なことを考え読み取ることで、現代社会を生き抜くヒントを得ることができます。そう、歴史を学ぶことは、現代を生きていく私たちにとって必要不可欠なことなのです。ですから、一年間、前向きに、日本史を学んでいきましょうね！

今回の学習内容について

今回は、江戸時代において続いていた鎖国体制が、黒船の来航により崩れ、日本国内が変化していく内容になっています。この内容で、まず、皆に考えてほしいことは、「なぜ、日本は開国しなくてはならなかったのか」ということです。そこには、日本側の国内の事情、アメリカの思惑などが存在します。現代の世界の国々の関係と同じです。それぞれの国の事情と国々の思惑があるのです。要するに、この開国に至った原因や理由を考えることで現代を生きる私たちのヒントを得ることができます。まずは、それらを考えるために、知識を身に付けましょう！

1. 黒船がやってきた pp36-37

◎19世紀の世界 p36

- 18世紀なかば以降、イギリスで(1 **産業革命**)が進行し、製品を安く大量に生産することが可能になった。
 - ・19世紀には、他の欧米諸国も(1)がはじまり、欧米諸国は製品の販売地と原料をもとめ、アジアやアフリに競って進出した。
- イギリスは、(2 **アヘン戦争**)で清に勝利し、清を開国させた。
 - ・清をめぐるフランスやアメリカも進出をもくろみ、アメリカは寄港地とするために、日本の開国を求めた。

◎ペリー艦隊の来航 pp36-37

- 1853年、(3 **ペリー**)率いるアメリカ艦隊が(4 **浦賀**)沖にあらわれた。
 - ・大統領**フィルモア**の国書を持参して日本に開国をせまった
 - ・老中である(4 **阿部正弘**)は諸大名に意見を伺った。⇒このことが、諸大名たちの権力を強めるきっかけとなり、討幕の原因ともなった
 - ・幕府は(3)に対し、翌年の回答を約束した
- 1854年、(3)が再び来航し、(5 **日米和親条約**)が締結された。
 - ・(6 **下田**)と(7 **箱館**)の2港を開いた
 - ・イギリス、ロシア、オランダとも同様の条約を結んだ。

◎通商条約の締結 p37

- 貿易をしたいアメリカは、通商条約を結ぶためにアメリカ総領事として、(8 **ハリス**)を下田に置いた。
 - ・老中の(9 **堀田正睦**)は、イギリスの脅威を説く(8)の圧力におされて、通商条約の許可を朝廷に求めたが同意を得られなかった。
- 1858年、大老に就任した(10 **井伊直弼**)は**孝明天皇**の許可(勅許)を得ないままハリスと(11 **日米修好通商条約**)を結んだ。
 - ・ついで、オランダ・ロシア・イギリス・フランスとも同様の条約に調印した(安政の五か国条約)。

- ・これらの条約では、さきの下田・箱館のほか、神奈川(横浜)・長崎・新潟(神戸)を開港することや、開港場には、(12 **居留地**)を設け、通商は(13 **自由貿易**)とすることなどが決められた。
- ・外国領事による裁判権(1 **領事裁判権 or 治外法権**)を認め、輸出入にかかる関税の率を日本が自分で定める権利(15 **関税自主権**)がないことなども盛り込まれて、日本にとって不平等な条約となっていた。

2. 志士たちの時代 pp38-39

◎開国の影響 p38

- 日本には、イギリスなどから(16 **毛織物**)・(17 **綿織物**)・綿糸・武器などが輸入され、日本からは、(18 **生糸**)・(19 **茶**)などが輸出された。
- ・貿易に伴い、貿易額の急激な増加、生糸や茶の不足、米価の急激な上昇などにより日本の経済は混乱した。
- ・経済の混乱に伴い、庶民や下級武士の生活はいっそう苦しくなり、開国による貿易への不満、西洋人への反感や不安をつのらせた人々は、当時広まりつつあった(20 **尊王攘夷運動**)を支持した。

◎安政の大獄 pp38-39

- 13代将軍の後継ぎ争いが起こり、国論は二つに分かれた。その状況の中で、大老の(21 **井伊直弼**)は、紀州藩主の(22 **徳川慶福**)を14代将軍(23 **徳川家茂**)とした。また、この決定に対しての反対派を厳しく弾圧した。
- ・このとき、長州藩主の(24 **吉田松陰**)や越前藩士の(25 **橋本左内**)ら多くの志士たちが処刑された。
- ・この処刑のことを(26 **安政の大獄**)という。
- (26)の処刑を受け、志士たちは憤激し、(21)は、1860年に水戸藩浪藩士に襲われて暗殺された。
- ・この事件のことを、(27 **桜田門外の変**)という。

◎尊王攘夷運動の展開 p39

- 井伊が倒れたあと、高まる尊王攘夷運動に対して、幕府(武)は朝廷(公)との結びつきを強める(28 **公武合体**)をすすめ、孝明天皇の妹の(29 **和宮**)が將軍家茂のもとへ嫁いだ。
- ・これに対し、尊王攘夷運動の戦闘に立つ(30 **長州藩**)は朝廷を動かして、1863(文久3)年5月10日を期して、攘夷の決行を幕府に約束させた。結果、(30)は、下関海峡を通る外国船を砲撃した。
- 公武合体の立場に立つ(31 **薩摩藩**)は、政局の主導権をにぎろうとして、1863年8月に会津藩と組んで尊王攘夷派(尊攘派)の長州藩士や公家を一掃した(32 **八月十八日の政変**)。
- ・長州藩は、翌1864年7月、京都に攻めのぼり、勢力の回復をはかろうとしたが、会津・薩摩両藩に敗れた(33 **禁門の変 or 蛤御門の変**)。
- 京都を攻めた長州藩は朝廷の敵とされ、幕府は同年8月、長州藩征討を全国に命じた(34 **第1次長州征伐**)。
- ・長州藩は、(35 **四国連合艦隊**)によって下関を砲撃されたことも重なり、幕府軍に降伏した。

3. 手を結ぶ薩長 p40

◎讓位から討幕へ p40

- イギリスは、イギリス人殺傷事件である(36 **生麦事件**)の報復として、鹿児島市街を焼いた(37 **薩英戦争**)。
- ・(35)や(37)を受け、薩摩・長州藩は欧米諸国の強さを実家し、攘夷が不可能であると悟った。
- 長州藩では、尊攘派であった(38 **高杉晋作**)が**奇兵隊**を引き手挙兵し、(39 **木戸孝允**)らと藩の主導権をにぎった。そして、軍備洋式化をはかりながら、藩論を討幕へと転じていった。

◎薩長同盟の成立 p40

○薩英戦争をきっかけとして、イギリスと接近していた薩摩藩でも、(40 **西郷隆盛**)や(41 **大久保利通**)ら下級武士が藩政を主導し、幕府への批判を強めた。

・土佐藩出身の(42 **坂本龍馬**)・(43 **中岡慎太郎**)が働きかけ、薩摩・長州の両藩は1866年、反幕府軍事同盟である(44 **薩長同盟 or 薩長連合**)を結んだ。

・この年、幕府は全国に号令して、ふたたび幕府に従わない長州藩を攻める(45 **第2次長州征討**)を行ったが薩摩藩はもちろん、多くの藩は消極的であった。その結果、幕府軍は、近代的装備でかためた長州藩軍に各所で敗れ、14代将軍徳川家茂が大坂城で病没すると、軍を引き上げた。

5. 江戸幕府が終わり新政府へ p46

◎大政奉還 p46

- 1866年に15代将軍に就任した(1 **徳川慶喜**)は、幕政改革を推進した。
- ・一方、公武合体の立場にあった孝明天皇が死去し、(2 **明治天皇**)にかわると、薩長同盟を結んでいた薩摩・長州両藩は、公家の(3 **岩倉具視**)らと結び、討幕へと動きだした。
 - ・しかし、翌年10月、(1)は、討幕の密勅を手に入れた薩長両藩の動きに先んじて、前土佐藩主(4 **山内豊重 or 山内容堂**)申し入れを受け入れ、朝廷に政権を返上する(5 **大政奉還**)をおこなった。

◎王政復古と戊辰戦争 p46

- 1867年12月、討幕派は、天皇を中心とする(6 **王政復古の大号令**)を発し、幕府を廃止して天皇を中心とする新政府の樹立を宣言した。
- ・この宣言をもって、おおよそ260年にわたる江戸幕府は終わりをむかえた。
- 新政府最初の会議(7 **小御所会議**)で、慶喜に対して(8 **辞官**)(内大臣の辞任)と(9 **納地**)(領地の返上)を命じる決定を下した。
- ・これを不満とした旧幕府側は、武力で新政府に抵抗した。
- 1868年(明治元年)1月、京都近郊の(10 **鳥羽・伏見の戦い**)から(11 **戊辰戦争**)がはじまった。
- ・新政府の西郷隆盛と旧幕府の勝海舟の交渉により、新政府軍は江戸城の(12 **無血開城**)に成功した。
 - ・さらに、新政府に対抗する(13 **会津藩**)などの東北・越後諸藩を屈服させた。
 - ・翌年5月、箱館の(14 **五稜郭**)に立てこもっていた榎本武揚らの旧幕府軍が降伏したことにより、新政府は、国内統一を成し遂げた。

第3節 近代国家の形成 pp48-69

1. 江戸が東京になった p48

◎明治維新 p48

- 戊辰戦争のさなか、1868年に、新政府は(15 **五箇条の(御)誓文**)を発表し、公議世論の尊重や知識を世界に学ぶことなどの、政府の基本方針を定めた。
- ・しかし、民衆統治の方針である(16 **五榜の掲示**)では、キリスト教の禁止など旧幕府の政策を受け継いでいた。
 - ・また、(17 **政体書**)を公布して、太政官に権力を集中させる政府の組織を定めた。
 - ・さらに、江戸を(18 **東京**)と改め、年号を(19 **明治**)と改元し、一世一元の制を定めた。
- 1869年、薩摩・長州・土佐・肥前の4藩主が、領地(版)と領民(籍)を朝廷に返上する(20 **版籍奉還**)を行い、諸藩主もこれになった。
- 1871(明治4)年には、中央集権の徹底をはかるため、薩長土3藩の兵士を東京に集めて(21 **(御)親兵**)とし、その武力を背景に(22 **廃藩置県**)を断行した。
- ・その結果、(23 **知藩事**)に東京移住が命じられ、各府県には政府が任命した(24 **府知事**)や(25 **県令**)が派遣された。
- 中央官制の改革もおこなわれ、太政官を正院・左院・右院とし、政府の要職は、薩長土肥の4藩の出身者で占められた(26 **藩閥政府**)。
- これら幕末から明治初年にかけての政治・経済・社会の変革を(27 **明治維新**)という。